

教育再生実行会議
第9回議事録

内閣官房教育再生実行会議担当室

第9回教育再生実行会議 議事次第

日 時：平成25年6月6日（木）9：00～10：30
場 所：総理官邸4階大会議室

1. 開 会
2. 高大接続・大学入試の在り方に関する討議
3. 閉 会

○鎌田座長 定刻となりましたので、ただいまより第9回「教育再生実行会議」を開催いたします。

委員の皆様方におかれましては、御多忙のところを御出席賜りまして、まことにありがとうございます。

本日から、高大接続・大学入試について御議論をいただきます。

本日は、中央教育審議会高大接続特別部会の安西祐一郎部会長においでいただいております。どうぞよろしく願いいたします。

最初に、安倍総理より一言御挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

○安倍内閣総理大臣 皆様、おはようございます。

まず、先月28日に本会議の第三次提言を鎌田座長からいただきました。委員の皆様におかれては、提言の取りまとめに御尽力をいただきまして厚く御礼を申し上げます。

この提言を、今後策定いたします成長戦略にしっかりと反映していきたいと考えております。

本日は、大学入試をはじめ高校と大学の接続の在り方について御議論をいただきたいと思っております。

教育再生の目標の一つであります世界トップレベルの学力を目指すとともに、第三次提言でおまとめいただいた世界に伍する大学をつくっていくために、高校と大学の接続の在り方は極めて重要であると考えております。

とりわけ、大学入試の在り方は、大学教育、初等中等教育の双方に与える影響が大きく、国民の関心も極めて高いテーマでもあります。

逆に言うと、大学入試に過度にエネルギーを集中せざるを得ないことが我が国の教育の問題点でもあると考えられます。

子供たちの能力を最大限引き出し、これからの時代に求められる力を育成するために、幅広い観点から御議論をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願い申し上げます。

○鎌田座長 ありがとうございます。

それでは、議事に入ります。

(報道関係者退室)

○鎌田座長 本日は、大学入試をはじめとする高校と大学との接続の在り方について議論してまいります。総理からの御挨拶にもありましたように、大学入試を含む高大接続の在り方は、大学教育及び初等中等教育の双方の在り方を改革・充実していくために避けて通れない極めて重要なテーマであると考えております。

このテーマにつきましては、文部科学省の中央教育審議会高大接続特別部会においても議論が進められているところです。そこで、本日は安西部会長にお越しいただきまして、中教審での議論の状況等について御説明をお願いしたいと思います。

なお、本日は、総理は公務のため9時40分ごろまでの御出席となりますので、よろしくお

願いをいたします。

それでは、安西部会長からの御説明を15分程度でお願いいたします。よろしく申し上げます。

○安西部会長 高大接続特別部会の部会長を務めております安西でございます。

本日は、お招きいただきましてまことにありがとうございます。15分以内ということでお話をさせていただきます。

高大接続特別部会の審議状況等について、まず御報告を申し上げたいと思います。資料1-1をご覧くださいながら御説明を申し上げます。

表紙をめくっていただきまして1ページ「高大接続特別部会について」。左側にこれまでの主な審議事項を書いてございますけれども、今まで7回にわたって特別部会の会合を開いてまいりました。

まず、諸外国の動向、高等学校教育の取り組みを踏まえた大学入学者選抜の在り方。この再生実行会議と重なる面もあるかと思いますが、アメリカのSATでありますとかフランスのバカロレア等々、諸外国でも大学入学者選抜にいろいろな方法を使っております、そういうことについて俯瞰しながら、また日本では中教審の高等学校教育部会において高校の学習到達度テストの検討が進められておりました、そのことも踏まえ、また、高等学校における教養教育の展開も踏まえまして検討を行っております。

これからの時代に求められる能力の育成と評価の在り方につきましては、学力はもちろんですけれども、学力以外の総合的な力をどういうふうに見ていくのかということが検討されてまいりました。AO入試・推薦入試の在り方については、半分近くの大学入学者についてはAO入試・推薦入試等々で入学しているわけですが、ある意味抜け穴になっている面もありまして、そういうことの検討。外部試験の活用の在り方については、英語あるいは特に工業高校ではジュニアマイスターの制度、これは電気工事士、ボイラー、工業英語検定など相当いろいろな検定資格がございますが、それらを取っていくと、シルバーあるいはゴールドのマイスターの称号が得られるという制度です。高等学校段階の学力状況の客観的な把握の仕組みの構築等、高等学校教育の質保証の在り方。九州大学では21世紀プログラムという方法で文理融合的な入学者選抜の方法を一部使っております。そういう例についての議論もしております。

また、入学志願者の多様な能力、適性等の評価の在り方については、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価あるいはルーブリックによる評価等々のいろいろな方法がございます、そういうことについての検討も行っております。

2ページ、左側の絵がベージュ色になっておりますけれども、現状では大学教育が非常に受け身の教育になっている。一番下の高校教育もまた同様に大変受け身の教育になっている。各大学の教育水準、あるいは進学希望者の学力・意欲・適性の関係、幅広い学習の確保、学習意欲の喚起等々、あらゆることが入学者選抜のところへ詰め込まれておまして、結局、大学教育と高校教育からのしわ寄せを入学者選抜のところへ引き受けていると

いう構図になっています。

これを何とか右側の赤色の部分にありますように、大学教育の質的転換、主体的に学ぶ力をつけていかなければいけない。右下の高校教育においては、質の保証をきちんとして、また教養を主体的に学ぶ力をつけていかなければいけない。その真ん中の入学者選抜については、多面的・総合的な評価にしていく必要があるのではないかという議論がされております。

3 ページ目にグラフが載っておりますけれども、これは高等学校における学習時間が左側の1990年から右側の2006年、15～16年の間に、緑色の斜め線がついておりますけれども、大体学力の中間層について一日の勉強時間が半分に減っているというデータがございます。理由はいろいろ考えられておりますけれども、やはり人口が減ってきていることによって、どこかに入ろうと思えば入れるようになってきたために、入試の勉強をしなくなってきたからだと言われております。入試の勉強をしなくなってきたら高校の勉強時間が減るということは本末転倒でございまして、高校の学習をどうしていくのかということのをこれいろいろ考えられるかと思っております。

4 ページ目、大学における学習時間も日本は非常に少ない。アメリカとの比較でございましてけれども、右側の横棒のグラフであります。授業に関連する学習の時間は1週間当たりで5時間以下というのが日本の大学生の大体70%近く、10人に7人は1週間に5時間以下しか勉強していないという状況がございます。社会科学系だと0時間が20%近くになると思っております。これも何とかしていかなければいけない。

5 ページ目、大学入学者選抜の方法、先ほど申し上げましたけれども、推薦入試・A0入試が実際にはかなりふえて、半分近くになってきています。ただ、これが青田刈りですとか抜け穴ですとかいろいろ言われますけれども、結局高校での学力をほとんど見ないでそのまま大学に入学させてしまうという構図が出てきているという状況がございます。

今、いろいろ申し上げましたけれども、6 ページ目、審議の中でも、高大接続は大学入試入学者選抜だけの問題ではございまして、高校までの教育、大学入学者選抜、大学教育を一体として捉える必要があるということは議論されております。

また、大学入学者選抜についても、ペーパーによる学力試験だけではなくて、意欲、適性、総合的な能力等々を多面的・総合的に評価するにはどういう選抜方法が望ましいかということをも具体的に検討していかなければいけない。いろいろな方法があるわけで、それについても検討しております。

評価手法について下にありますようにパフォーマンス評価。これはいろいろな作品をつくるか、あるいは外でいろいろな体験をすることか、1つの細かい知識を得ることよりも総合的な場でもって全体的な知識を得ていく、そういう中で高校の力がどうついたか、そういう評価の仕方です。

7 ページ目、7 回議論をしてきておりますけれども、その議論の方向性といたしましては、今、申し上げたように高校教育の質の保証のための取り組みを充実させていかなければ

ばいけませんし、教養教育の問題もあります。2番目の○にありますように「高等学校学習到達度テスト（仮称）」、そういう仕組みが検討されておりますけれども、これを就職試験あるいは推薦入試・AO入試等にも活用できるのではないかと。学習到達度テストの方法はまだ検討中ではありますが、やはり高校生一人一人が自分でもって志望してチャレンジしていけるような方法が、これは多少私見が混じりますけれども、そういうことが望ましいのではないかと思います。

3番目の○は、大学入学者選抜においては、1点刻みの点数を競うのではなくて、多面的・総合的な評価が必要であろう。

4番目は、検定・資格制度の導入等々もあり得る。

5番目は、大学入試センター試験の在り方については、やはり細分化が進み過ぎているように思います。これを見直すべきだろうと思われま。

あとの2枚は参考でございますので、大体以上であります、結局高校教育、大学入試、大学教育、この3つを一緒にして同時並行的に改革を進めていく必要がどうしてもあるということで審議を進めてきているところであります。

これまで申し上げたのは高大接続特別部会の御報告であります、資料1-2に個人的な見解も含めまして多少のことを書いてございます。

1番、2番は、人材育成、人材獲得は日本だけではなくて主要国の国家戦略になっておりまして、我が国では高校教育、大学入学者選抜、大学教育の同時改革が喫緊の課題だと考える、ということです。特に教育の現場が早急に変われるようにしていかなければならない。やはり一番の課題は、例えば大学教育の改革と言いましても変えるのは大学でございまして、それをできるだけ早く誘導して、旗をこちらで上げていただいて、中教審も一緒になって、早く転換をしていかないと、これは日本としては取り返しのつかないことになると思っております。

2番はいろいろ書いてありますが、3番も含めて申し上げますと、世界に冠たる教育立国にしていくには、また、していきたいと思っておりますけれども、さまざまな事情や環境によって機会均等が損なわれたり学歴格差が生み出されることのないように、教育弱者が切り捨てられることのないように、公正さが保たれるように十分配慮しなければいけないと思っております。

また、それには4番にありますように大学の情報公開の推進が不可欠であります、実際にはまだまだ大学の情報公開が進んでいないのです。やはり受験生あるいは保護者から見て、どの大学も中身が十分透明に見えるようにすべきだと思います。

5番、6番は先ほどと重なります。

7番、世界トップレベルを目指す大学の入学者選抜というのは、やはり世界一流の大学と学生獲得の競争をするわけですから、世界の目線でもって入学者選抜の方法を考えていかなければなりません。地域に根差していく大学はまたそれと違った方法があつてしかるべきです。

国際化していくためには、8番にありますように、海外からの留学生に対しても入学者選抜が適用できるようにしなければならないでしょう。

9番、10番にあるように外国語能力の検定や理数教育の考え方をきちんと入れていく必要があると思いますし、11番はICTの活用、12番は今後10年でもって小中高の先生方が大幅にかかわると言われておりますけれども、この際、新しい教育理念を持った教員が養成できるような仕組み、仕掛けをぜひ導入していただきたいと思います。

13番は、カリキュラムの可視化です。

14番は、いろいろな不可抗力の事情、環境などによって、特に海外留学などの機会が影響を受けないで済むように、また授業の準備に十分時間を費やせるように、アルバイトをしなくても勉強に専念できるように、奨学金等についてのきめ細かい支援が必要だと考えますし、一旦入った大学が合わないのであれば転学も可能なように、学生の流動性をふやすようにしていかなければいけないと思います。

最後に、質的転換のためには、やはり財政支援の強化はどうしても必要であります。少人数のディスカッションクラスなどをふやしていかなければいけないと思いますけれども、それには大学のガバナンス、マネジメントの改革が必要だと思います。全体として大学入学者選抜の御報告を兼ねてお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。

○鎌田座長 ありがとうございます。

引き続きまして、自民党の教育再生実行本部でも、先般、提言が取りまとめられたところですので、遠藤議員に御説明をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

○遠藤衆議院議員 では、教育再生実行本部第二次提言をお手元に示してありますので、ご覧になりながらお願いいたします。

最初の「はじめに」の後、2ページに「『大学・入試の抜本改革』部会」がございます。

1月24日に経済再生、教育再生を日本再生の柱とする安倍政権と与党として支えようということで、自民党教育再生実行本部を改めて設置いたしました。

1つは、グローバル人材育成のための学力向上、とりわけ英語教育、理数教育、そしてICT教育について特化して議論をさせていただきました。

2つ目は、6・3・3・4制の見直しなど、多様化あるいは複線化した制度へというようなことから、平成の学制大改革。

3つ目につきましては、教師インターン制の導入や管理職の資格化など、新入材確保法による教師の資質向上。

4つ目に、大学入試の抜本改革について議論をいたしました。

1月からスタートしまして、5月末までに本部会議あるいはインナー会議あるいは視察等、数十回にわたる議論等を通じて集中的に進めてまいりました。

第1のグローバル人材育成のための学力向上につきましては4月8日に、平成の学制大改革あるいは新入材確保法、そして大学入試の抜本改革等のテーマにつきましては5月23

日に安倍総理に提出をさせていただきました。

全体として提言内容であります。1つは戦後教育の特徴でありました結果の平等主義を廃止する。その上で、子供の能力や成長スピード、あるいは興味や関心を生かした多様化、複線化した制度での人材育成を基本とする。

2つ目は、小中一貫や中高一貫あるいは小中高一貫や高大接続など、確固たる教育理念による効果的あるいは効率的な人材育成を図る。

3つ目に、特に初中教育全体を縛っている大学入試の抜本的改革が必要、点数輪切りの一発勝負方式から高校時代の学力とともに多面的な活動評価へ転換をする。

入試改革の具体的な提言としまして、まず1つは、高校在学中に複数回挑戦できる達成度テストの創設。

2つ目としまして、大学入試においては、現在の大学入試センター試験を廃止し、達成度テストを活用する。ただ、これについては受験生もおりますから、全体を配慮して提言の文書には記載はしておりません。センター試験を廃止するというを前提にして達成度テストを創設する。

3つ目に、英語試験を廃止してTOEFLなどの試験を受験の条件にしていく。

4つ目に、大学は達成度テストをベースに多様な学習評価や多面的な活動、論文・面接などを通じて、それぞれの大学が求める人材を採用。

5つ目に、国際バカロレア認定校の大幅な拡大。およそ5年間で200校、こうした拡大をしていきたいという取りまとめをさせていただいております。

2ページとその後に少し箇条書き的に、6ページにまた書かせていただいておりますので、ごらんいただければと思います。

以上、簡単ですが、報告とさせていただきます。

○鎌田座長 ありがとうございます。

それでは、ただいま御発表いただいた内容も踏まえまして、本日は高大接続・大学入試につきまして、委員の皆様のお考えを自由に御発言いただきたいと思っております。御意見のある方は挙手をお願いいたします。

なお、最初に申し上げましたように、安倍総理の御予定もございまして、できるだけコンパクトに御発言をいただければと思っております。

加戸委員、貝ノ瀬委員、そして鈴木委員の順でお願いいたします。

○加戸委員 ありがとうございます。高等学校サイドからということになりますが、入試に関して私の持論を申し上げたいのは、高等学校教育にタッチされていない大学教官が大学入試の問題をつくられる、ここに根本原因があるので、だから、大学に入るためには3年生のときにはもう高校教育をいかにげんにして予備校塾に通うとか、あるいは失敗して予備校塾に行くことによって自分の志望校に入れる。

ですから、この問題を直していくには、大学入試の問題は少なくとも高校学校教育の経験者が、現職あるいは退職された方がいいですけれども、委託して問題を作成してもら

うか、原案をつくっていただいて、それを大学側が試験問題として採択するか、こういう方法をとらない限りは解決しないのかなど。高校教員のぼやきは、特に進学指導教員のぼやきは直らないと思います。

高等学校教育を正常に学習指導要領に基づいて受けておれば、大学入試の試験で高点数がとれるという仕組みをとるためには、例えば試験問題が不適切であると、入試オンブズマン制度のようなものがあって、この大学の問題は極めて高校教育にとっては不適切だというバッドマークが3年連続ならば、助成金あるいは交付金を減額するとか、そういうことで組み合わせて、要するに大学側で、高等学校教育をちゃんと受けて、そこでマスター、修得したものが高成績で大学に入れるという仕組みを構築しない限り、いろいろなことをやってみてもなかなか解決にならないのではないかとというのが私の意見であります。

○鎌田座長 それでは、貝ノ瀬委員、どうぞ。

○貝ノ瀬委員 ありがとうございます。大学入試の在り方が義務教育の段階まで、大きく影響しているというのは事実だと思います。ですから、大学教育の在り方が根本的に問われなければならないということで、今、両先生からお話がありましたけれども、おおむね私は理解できる内容だと思います。

特に一発勝負で大学を決めるというやり方はしっかり見直さなければならないと思います。特に高等学校の教育が学習指導要領に基づいて高等学校教育が行われているわけですが、しかし、じっくりと高等学校の教育に専念できるという状況になっていないということです。高校生に言わせると、勉強するというのはまさに受験勉強をしているというようなことに置き換えられているわけで、安西先生おっしゃったように、勉強時間の中で受験の勉強を外してしまうと何をやっているのだろうということになります。やはり自分の学びといいますか、しっかりと自分の学習を確立させるような主体的な態度を義務教育の段階から身につけなければならないということです。そして義務教育の段階から主体的な学びをどうつけさせるかということも考えなければならないと同時に、遠藤先生おっしゃったように複数回の到達度テストをやって何回かの中で一番いいのを採用するとか、また、学力だけではなくて総合的に評価するということになると、義務教育段階からの学習履歴といいますか、ポートフォリオの蓄積を一方で大学入試に活用していくということもあっていいのではないかと思います。

また、これは全体にかかわりますけれども、子供たちの自信というものを身につけさせるために、自尊感情とか、自分がかげがえのない存在だという肯定感をしっかりと幼児の段階から、親もそうですけれども、社会全体でそういう意識を持って育てなければならないと思います。

以上です。

○鎌田座長 それでは、鈴木委員。とりあえず、あと3分ぐらいで御発言ください。

○鈴木委員 ペーパーを出してあります、「鈴木委員提出資料」です。

1～3ページまでありますけれども、簡単に申し上げます。

高大接続の問題について、このところ話が出ているわけですが、基本的には、大学の入試改革に反対するものではありません。第1番目に推薦・A0入試における学力担保について申します。

先ほど安西先生からお話がありましたが、非常に役割注目されています。高校現場から推測される課題や対応点について、(1) (2) (3) と一応挙げてみました。内容的には目を通していただければわかります。高等学校の履修が3年の12月ぐらいで大体終わるといったことを考えながら実施していく中で、A0入試や推薦とかそういったものに全部活用できるような形で到達度テストが実施されるとすれば、12月から1月あたりに数十万人の受験者が集中することになります。その辺の高等学校側、特に生徒や保護者への周知を含め、受験インフラの整備には膨大な費用がかかると思いますので、その辺の対応が必要になるかと思えます。

第2点は、この到達度テストを考えれば、早々に高得点をあげる生徒が授業先取りの一貫校などに多数出てくるわけです。試験との関連で、この到達度テストで一定目標点を達成した生徒が授業からドロップアウトしたり、授業に参加しないという形が現れ、高等学校3年の授業の多くの部分がやはり形骸化してしまって成り立たなくなるおそれがあります。

逆に、小学校から一貫教育で行われるような有名附属の初中等科であっても、それが実質的に高等学校レベルでは学力が不足して大学に入れないうような低得点の生徒が続出するようなことも考えられます。その辺も含めた慎重な議論が必要です。

3点は、現状のA0入試の合格発表は、先ほど安西先生からも指摘されましたように、青田刈りになっています。さまざまな大学等で定員確保のための重要な手段になっている、そんな実態があるわけで、私個人としてはこの様な状況を見ますと、少なくともA0入試については廃止を含めた形で再考した方がよいと考えています。

2番目は国際バカロレアです。

前とも関連しますが、国際バカロレアにつきまして、文科省の国際課を中心に取組んでおられます。国際バカロレアについては、今後取組みを進めるにしても、いろいろな形の阻害要件がありますので、是非それを解決していただきたい。バカロレアの各科目のレベルが決して高いものではない実態も含めて検討していただきたい。

数学の授業を英語でやった場合、世界でも一流と言われる日本人学生の数学の力が逆に低下するようなおそれが生じないかなども心配しています。それから、国内の大学自体にほとんど普及していない状況もあります。

バカロレア導入に対して、海外留学の経験を持った高等学校の先生方が少ないために、先生方の意識が低く、なかなか海外進学に意識が及んでこないという問題もあると思えます。

3番目は、高校留学と高大接続です。前回は申し上げましたが、少なくとも高校生には短期間の留学体験を持たせる、ないしは海外交流体験を持たせることがある意味では一番

よいのです。それが高校生の海外飛躍の壁になっている「海外に対する抵抗感」とか「英語に対する恐怖感」、苦手意識を取り除く力になるかなと思います。

あと、外部検定につきましてTOEFL等の課題を再度書かせていただきました。

あえて申し上げますと、3ページの最後には書いていますが、やはり文部省、大学入試センター等が率先して、韓国のNEATなどの動きをにらみながら、「国産」の英語力検定試験の開発に早く取り組んでいかなければなりません。TOEFL等の問題点を把握しながら、4分野の英語力の指導と検証方法を考えるべきだと考えております。

以上です。

○鎌田座長 ありがとうございます。

最初に申し上げましたように、ここで総理が次の公務に移られる時間となりますので、その前に一言お話をいただければと思います。

○安倍総理 大変短時間で恐縮でございますが、今お話を伺った中においても、現在の大学の入試の在り方によって、高校が事実上予備校化しているという課題もございます。

A0入試についても、それを導入するときには、別の観点から大学入試の在り方に一つ穴をあけようということだったわけでありまして。しかし、政策というのは、ゆとり教育もそうですが、そのとき政策をつくった人の思惑どおりの結果には、なかなかならないということの一つかもしれないという印象を受けたわけでございます。

いずれにせよ、小学校から小中高大へとつながっていく中において、大学の入試の在り方そのものにより全体に極めて大きな影響が出てくるということを改めて認識させていただきましたので、どうぞよろしく御議論のほどをお願いいたします。

○鎌田座長 どうもありがとうございます。

総理はここで退室されます。お忙しい中、まことにありがとうございました。

(安倍総理退室)

○鎌田座長 それでは、引き続き議論を続けたいと思いますので、御意見のある方は挙手をお願いします。

八木委員、次に川合委員、尾崎委員、そして大竹委員、お願いします。

○八木委員 私は公立の大学に勤めているのですがけれども、倍率もある程度あって募集にそれほど困っていないところでもあります。しかし、それでも数えてみますと年間8回入学試験をやっているのです。いわば1年中入試をやって、1年中入試問題をつくって、1年中入試業務をやっているということです。あまりにも入試が細分化して大学自体が振り回されているという現状があります。本務が非常におろそかになっているということです。

何種類も入試があるものですから、入ってくる学生の学力に非常にばらつきがあります。先ほど抜け穴というお話もありましたし、私はバイパスだと考えているのですがけれども、特に編入・転入試験の場合は、とても私の勤めている大学に入れなような学力の学生がどこかの大学、例えば通信制の大学を経由して入ってこられるという現状もあります。

2番目として、この会議の第三次提言では、とにかく大学が学生を鍛え上げられる教育

機関に変えていこうということが打ち出されております。そして、それによってグローバル人材、イノベーション人材を育成しようということですから、高校段階においても当然それとの整合性を持たせるべきで、鍛える教育に変えていくということです。それでなければ、世界に冠たる教育立国にもなれないと申しますか、同時にグローバルな競争に勝ち残れないということでもあります。現行では怠けることを許容する教育あるいは入試ということになっておりますので、それを鍛えるものに変えていくことが必要だと思います。

3番目として、今朝の日経新聞でセンター試験を廃止して達成度テストに変えていくということが大きく報じられていましたが、ここに来る電車の中でも、若いビジネスマンがそれを話題にしておりまして、皆さん関心があるのだなと思ったのです。そこで1つ提案ですけれども、達成度テストを導入する場合にも、「大学入学年齢=18歳」という枠を外すというのが前回の提言の内容でもありますので、受験年齢を下げ、達成度があるレベルに達している場合には大学入学できるようにするという事も考慮してはどうかと思います。

皆さん御存じの岡崎久彦さんという方がおられますが、この方は卒業証書を持っているのは小学校だけということなのです。あとは全部飛び級で外交官になられたということです。かつてはそういうことも一般的でありましたから、そういった多様な人生が送れるようにしていくことも必要と考えております。

以上です。

○鎌田座長 どうぞ。

○川合委員 今の御意見とかぶるところもございます。

まず、高等学校の学習の質の保証に対しては、内容は吟味する必要があると思いますけれども、提案されている達成度テストを実施する、それできめ細かな質の保証をする方向がよろしいかと思っております。

達成度テストが早めに終わってしまうと、その後学習しなくなるという心配は今の御意見と全く同じですが、そういう場合には大学入学資格を早期に与え、高校を短縮してでも卒業することが大事だと思います。達成度認定をもって、卒業を可能とするシステムへと変えていくのがよろしいかと思えます。

諸外国の中には、飛び級を積極的に活用している所も多く、早期に上級学校へ進学させるシステムが実施されています。私が知る限り一番若かったのは、21歳で既に博士の学位を持っているイギリスの青年がポスドクで日本に来たことがあります。さすがにびっくりしましたが、非常によくできる方でした。これが1つ目の意見です。

大学の入学試験と高校の質の保証は切り離して考えるべきだと個人的に考えております。高校の質の保証は大学の入学資格として利用するのが適切であって、入学資格として利用するという意味は、大学の教育の中でも高校の達成度テストの結果を反映した形で大学のコースが選べるようにすれば、入学試験だけを目的とするのではなく、上級学校での教育につながる教育を高等学校で目指せる可能性があると考えています。

大学の入試に関しては大学の特性や特徴によって、課すべき入学の条件というのは当然変わってくるわけで、そこは大学の個性を反映できるような形を残しておくほうが、大学の独自性を育てる上で有効だと思います。

現在の大学入試センター試験についての批判が大分ございますけれども、この問題は高等学校の指導要領に示されたコースそれぞれに1対1に対応するように入学試験をつくるという発想に基づいているからだと思います。これはむしろ達成度テストに近い考え方であり、それが現在の入試センターのところの試験に反映されているのだと思います。

そこを少し切り分けて、本当に個々の大学にとって必要な人材をどう評価するか、高等学校と大学の教育のつながりをどうするか、この2点はもう一度改めて見直す必要があると思います。

以上です。

○鎌田座長 尾崎委員、どうぞ。

○尾崎委員 高校段階での教育というのは、その後、大学に進学するということを考えれば、恐らく大学段階で学んでいくことに必要な部分というのはしっかり身につけさせていくことが必要なのだと思うのですが、現実問題として、例えば経済学部に進学しているのに数学の「す」の字も知らないとかそういう学生が現在いらっちゃって、大学に入ってから補習しているとかという話も伺ったりします。

やはり高校段階の教育をいかに大学に接続させるか。大学段階で求められる教養、知識というものを高校段階でいかにつけさせるかという形で本来は高校教育があらなければならないのでしょうか。ただ、残念ながら、その間を接続する入試というのが全く別の論理で恐らく行われていて、結局これは何かというと選抜の論理で行われている。というか、一発で入試をやる限りにおいてはそうならざるを得ない。ですから、本来大学で学んでいくに当たって必要な教育、能力がついているかということよりも、ほかの人と差別がつくような形で入試を出して行って、知識の多寡であるとか、そういうのももって入試が行われてしまう。入試には受かっているのですけれども、大学教育でそもそもついていけないというような状況が生まれる1つの原因があるのではないかと思います。決めつけすぎではいけませんけれどもね。

ですから、選抜の論理ですけれども、ただ、その選抜の過程において、大学教育で必要な能力が身につけているということが確認できるような選抜方法というのを果たしてどうとっていくか。能力の確認と選抜の論理とをどう整合させるかといったとき、やはり一発で選抜するというやり方というのは限界があるのではないかと思います。

先ほど来お話のありましたような、高校段階において幾つか試験を実施して、その試験を複数回実施して、その複数回の中でだんだんと本来の力が身につけているかどうかを確認できるような制度があっているのではないかと。1年段階、2年段階、3年段階でそれぞれ3回ぐらい試験をやって、その結果を例えば総合評価の半分にするとか、あと残りの半分は大学入学試験でもって選抜をする。そういうやり方は1つあるのではないかと思います。

す。

さらに大学によって、その3回やる試験のうち、どの部分の評点を非常にウエート高く評価するかということを大学自身に選ばせるということもあるのではないかと思います。大学生ぐらいの段階になってくると、数学はからっきしだめだけれども、国語になるとすばらしい、そういう子を評価するなどということは当然していくべきになってくるでしょうから、ある段階からは例えば国語のウエートを非常に高くこの大学では見ますよとか、この大学では経済学部、数学は必須ですよと、確実に評価しますとしておくとか、そういうやり方があると思います。

問題は全国統一で、本当に能力が身についているかどうかを判定するような全国共通の問題を英知を集めてつくればいいと思うのです。そういうやり方が一つあるのではないかと思います。

○鎌田座長 どうぞ。

○大竹委員 私は2点皆さんに事例を通じて問いかけをしたいと思うのですが。第1点は、数十年前の実例でロサンゼルスで聞いた話です。新聞記者が、フィールズ賞¹をもらった方は、恐らく100点満点で大学に入学したのだろうということで大学に取材に行きましたところ、0点だったそうです。それでも合格させた。なぜかという、問題の解き方に非常に天才的な面が見受けられたということで入学を許可し、結果的にフィールズ賞をもらったというケース。これは極端かもしれませんが。

何を申し上げたいかといいますと、非常に異能、異才、そういう人材を発掘して育てるという文化を日本国につくり出すことが極めて重要ではないかということです。

もう1点は、15年前なのですが、当時、富士ゼロックスの社長でございました小林陽太郎さんとアスペン研究所²を日本に導入いたしました。これは世界のリーダーが人間学について学ぶものです。現在は高校生も学んでいただいております。ここでは古典から学ぶことで非常に深い思索といいますか、思想哲学を早い時代に身につける。そのことが将来にとってものすごく効果が出てくるわけです。そういったことも高大接続のテストの中では結びつきにくいと思いますが、高校時代から深い教養を認めていただいて、それが将来大学で花開く、あるいは社会に出てから、より貢献できる人材になっていただくということも私は皆さんと一緒に御議論させていただきたいと思います。以上です。

○鎌田座長 ありがとうございます。

ほかにありますか。

曾野委員、どうぞ。

○曾野委員 素人風に申しますと、もう何年前になるかわかりませんが、○×式と

¹数学のノーベル賞といわれる。4年に一度開催される国際数学者会議（ICM）において、顕著な業績を上げた40歳以下の若手の数学者（4名まで）に授与される。

² <http://www.aspeninstitute.jp/>

いうものが学校の答えの中に入ってくるようになったときから、私は絶望したのです。これは人間性を生かした教育になっていない。何で答えをするかという、日本語を駆使して答えるべきである。でもすでに、先生方あるいは学校の組織がそれにたえなくなっているからだ。学校の先生も作文の時間にいちいち作文帳というのをお読みにならない。昔の先生というものは、生徒が書いた作文帳を何十冊も抱えて、重いのに、下手くそなのもよく読んでくださって批評を書いてくださった。そういう時代があったが、それはもうとっくになくなったのだろう。

ですから、今の日本では、デパートに行っても、美容院に行っても、日本語をまともにしゃべれる人がいない。私はせめて日本人と日本語で十分にしゃべりたいと思う。型通りのマニュアルの返答しかできない。ですから、主体的に学ぶなどという非常に高級な感覚を持った人はクラスに何人かいるかという状態です。

続けて、先ほどどなたかがおっしゃったのですが、自分がかけがえのない人間だなどと、私はそういう感覚は全くわからなかった。自分は死なないで、どうしたら生きていいかということでした。かけがえのない人間などと思う人がいたら気持ちの悪い人で、私はつき合わないと思います。どうやったら自殺しないでいられるか、首くくるのも御迷惑だからという感じでしたね、それとお父さんとお母さんが適当に貧しければ、将来自分が稼いで親に米代ぐらいは届けなければなるまいということから自分の存在の認識を考えるのであって、かけがえのない人間だなどと思い出したらどれだけ自己評価が狂うか私はわかりません。

ですから、まず日本語でその人間の評価できるように、早い時代からの作文教育にみっちりなさるということを学校でしない限り、入試の方法に○×式が残ったら、又もとと変わりません。

○鎌田座長 ありがとうございます。

武田委員、どうぞ。

○武田委員 私も大変素人的な意見になるのですが、自分自身がスポーツで、高校でも大学でも推薦入試で受験をしてきまして、そのときに抜け穴というか、やはりスポーツ選手はスポーツに対して割く時間が大変長いので、私は8月末まで遠征に行きながら9月14日に受験だったというような経験もあり、正直なところ、やっていれば受験というか勉強は少なくともいいのだというような生徒さんも多いのではないかと、自分の自戒を込めて思います。今、提言の案にも出ている、到達度テストが何度も何度もこの間にできて、自分の到達度を知るということは意欲にもつながるので、議論はとていいことだと思います。

ただ、勉強の時間がない中でも、やはり国際的にどんどん活躍できる人材をとということであれば、受験にもちゃんとしっかりと就職テストにもあるようなテーマを与えられて話すという、そのような能力がそういう人にも必要になってくるので、受験の在り方、多様性もありますが、ぜひそのあたりも検討に加えていただきたいと思います。

○鎌田座長 佃副座長、どうぞ。

○佃副座長 私は今までの委員のおっしゃったことに賛成です。高大接続というタイトルがついているのですが、これは先ほど川合委員がおっしゃったように、接続はしていないと、完全に分離されたものだという意識が非常に大事なのではないかと、接続してはいけないのではないかと思います。私も高校までの教育というのは、社会人として今後長い60年間を生きていくための基本的な資質というものを養うために完結するところだと、高校までで完結するのだと。リベラルアーツも一旦完結するのだと私は前に言いましたけれども、私はそこで完結して、その素養を得て、大学は専門家をつくることです。したがって、大学で行う入試というのは、学習度到達テストというものを評価しながら、どの程度評価するかというのは大学のキャラクターによって変わってくる。入試そのものも1科目だけでやるにしても、論文だけでやるにしても、それは大学のどういう専門家をつくるかという思想によってもものすごくバリエーションがあっているのではないかと。高校と大学は接続しないという考え方に立つという、私は川合委員の御意見はそういうことだったと理解したのですが、それで私は大賛成です。

○鎌田座長 加戸委員、どうぞ。

○加戸委員 今の御意見に逆らうわけではないのですが、基本的に大学がどんな学生を求めているかということは理解できますから、そのために論文を課するとか英語でヒアリングをすることか独自の方法はよろしいのですが、少なくとも学習指導要領に基づいて高等学校で完結する教育を受けてきて、極端なことを言えば、高校で100点満点の方がいらっしゃっても大学受験では合格するとは限らない。その大学の特殊な傾向と対策を勉強し、予備校へ行き、受験技術も学ばなければ合格しないという現実があるから、実際は6・3・3・4制ではなくて、6・3・3・1・4制になっている今の実態を高等学校の先生方はものすごく感じているのです。塾や予備校に行かなければ、自分たちでは本人の志望校に行かしてあげられない。

この現実をどう受けとめるかということであって、高校は高校、大学は大学という話ではないと思います。少なくともいろんな多様な入試方法、共通1次配分をどうするかよろしいのですが、大学独自の高校をベースにした入学試験ということに関しては、高等学校教育を大切にしてほしい。難問、奇問で選んでそこで差別してはいけない。だから、高等学校は正常に教育できるような形で、直すべきところは大学入試問題であるということ、私は強調したいです。

○佃副座長 わかりました。済みません、言い方が誤解を生んだように思いますが、大学側が受け入れるときに到達度テストの評価をどの程度評価するか。これは非常に大事なことで、これは間違いのないわけですので、到達度テストを80%評価して、あと自分の独自にやる入試を20%評価するか、それはいろいろバリエーションがたくさんあるはずであるという言い方をしたわけですので、決して軽視するということではございません。

○鎌田座長 それでは、川合委員、どうぞ。

○川合委員 誤解を招いているといけないので、もう一回繰り返します。

私が主張したいのは、大学入試が高校教育のゴールと考えるのではなく、高校の教育は要素や項目として大学の教育につながっているということを改めて認識するべきであるということです。この当然の事実を生かす接続の仕方をぜひ考えていただきたい。そのためには、例えば大学に入ってカリキュラムを選ぶときに、高校の到達度テストで認定された項目があれば、そこは履修済みとするなど。大学教育においても、仮に高校時代に履修済みである項目があれば、その成果を反映して大学の教育期間を短縮可能にするシステムにつなげていくべきだろうと考えます。大学入試を最終目標とするのではなく、高校教育は大学教育の前段階と位置づけ、教育内容をつなげていくことが高大接続の一番重要なところであり、そのための工夫をしたい、できたらいいなと思っています。

入試に必要な必要でないかをもって、高校教育にバイアスが掛かる現状は問題です。入試だけではなくて、教育として接続するシステムを目指すべきです。到達度テストも、大学に入ってから必要とする項目を意識した形で試験項目が設定されれば、教育内容での高大接続も不可能ではないと思います。この点が一つ大事なポイントでした。

○鎌田座長 山内委員、どうぞ。

○山内委員 大学が、そういう御趣旨ではないかと思いますが、高校での教育の結果、プロセス結果、修得度、これに無関心であるというような誤解あるいはイメージを喚起されているので一言申し上げておきたいのです。

これは入学試験の難易度とか大学によってそれぞれ違いますから、そのどこに焦点を合わせて高校の教育内容や結果を尊重して、あるいはそれを踏まえてやっているか。これは違ってくるのだと思います。入試にかかわっていく委員、出題プロセスというのは、私の勤めていた東京大学においては、大学入試というのは大学の最大行事だという位置づけでやっていきます。

一応、各教科の出題委員や責任者は相当な努力をして、少なくとも第一に教科書、各出版社が出している教科書を全部精査するのは当然です。

2つ目、いわゆる大学入試に出されてくるような頻度の問題、これも完全に精査します。

3番目は、実際に高校の先生方は教科書の作成に当たっている方が多いですから、そういうところを通して直接、間接に高校の現場との接続というのは少なくともなされている、あるいはしようという意欲があるということではないでしょうか、大学のほうで営みとしては不十分かもしれませんが、高校の教育と全く無関係にやっているということはないと思います。

2つ目は、入試というのは芸術的な側面がありまして、東大の場合、いろいろな科目では、かなり苦勞して芸術的ともいわれる問題をつくる。非常に苦勞して、いろんな工夫、知恵を絞ります。これは外国語に関しても、高校生の習熟度に対してもきちっとケアし、才能がある子をできるだけとりたいという努力を現行制度の枠内ではしているという努力

も申し上げておきたい。

これは生徒の学生の質の問題に関連して、今度は私個人の問題になりますが、私の高校時代は高度成長に差しかかったころでしたので、当時の青年の常として、中高から理工系、特に将来工学部に行って技術を学びたいと思った時期があります。したがって、高校は2年間、2、3年と理科系のクラスを目指しまして入りまして、したがって物理、化学、数Ⅲ、全て理系進学者の常として勉強したのです。ところが、私は2年の後半から3年ぐらいいにかけて、自分の才能は向いていないと、これは無理だろうと。先生や友人たちは、お前はどうも文科のほうに行ったほうがいいのではないかというアドバイスがありまして、高校の3年になったときに文転と言うのですが、普通、大学で起きる現象ですが、高校のときに文転をしまして文科系に移った。

人間のいろいろな資質や才能というのは多々ありますけれども、自分が自分自身として知らないことはあるのです。そうしたことを周囲の力や先生の高校におけるアドバイス、それらによって進路も考える。自分自身だけで悩まずに、あるいは先生が先ほど作文たくさん抱えてというのがありましたが、そういう親身になっていろいろ相談というよりも指導してくださった先生には感謝しておりますし、そういう雰囲気というようなものをどうやったらつくれるかというのが私の永遠の夢です。

私としては、この自民党の部会の中にありましたが、基本的に志という問題です。私は中高一貫校の中学2年生を教えに行ったことがありまして、そのときに夢と志はどう違うのかということ議論したことがありました。夢を国や国民のためといった高いレベルに高めるのが志だと説きました。これはNHKのテレビを通して放映されました。誰もが夢は持つだけけれども、夢を現実に変えていくためには、自分が社会や人というものに対して何を成し得るか。少なくとも具体的に実現していくようなことを方策として考える、ここに志というものが出てくるということ中学2年生に話したのです。そういう意味で志を一般の教育においても育てるプロセスをぜひ大事にしていきたいと思いました。

○鎌田座長 それでは、河野委員、佐々木委員、お願いします。

○河野委員 ありがとうございます。先ほどの安西部会長の話の中にもありましたが、「高大接続」は、大学入学者選抜であるとか、大学教育と高校までの教育、これを一体として捉えることが大切であるとありました。義務教育に対しても、これから議論する中でかなり影響を与えるものではないかと思っております。

少し余談になりますけれども、第三次提言において、「これからの大学教育などの在り方」が議論の中心でしたが、報道では「小学校英語教科化」が一番大きく取り上げられていました。実行会議の議論では、大学教育の在り方に関わり時間を割いたと思うのですが、義務教育が国民全体に関わることなので、非常に関心が高いという表れではないかと思っております。学校現場においても、報道を見て反響が非常に大きかったのではないかと思います。学校現場は、現状で物事を捉えてしまうので、英語の教科化という報道に対し、戸惑いを感じる教員も相当いたのではないかと思います。

提言を、先ほど申しました小学校での英語の教科化を、実効あるものにしていくためには、先進的に取り組んでいる自治体の検証を十分に行った上で、目標を明確にし、指導体制の強化、指導内容や指導方法の研究、教材・教具の充実、評価の在り方などを、現場の実態を踏まえ、しっかりと丁寧に議論していただきたくよう、文部科学省の皆様方をお願いしたいと思っております。

戻りますが、義務教育への影響ということになりますと、先ほどの貝ノ瀬委員の御意見に賛成です。今、高校生の学力というのが二極化しているという状況がありますが、これは高校教育の在り方だけが問題であるとは言えないと思います。当然、義務教育においても児童生徒の学ぶ意欲をどう喚起していくかということであるとか、基礎学力の充実を図るということが大事だろうと思います。義務教育段階における個に応じたきめ細かい指導を可能にするような指導体制の強化であるとか、教育環境の整備ということも併せて提言に盛り込むのであれば、議論をしていく必要があるかと思っております。

最後に、高校の先生にお話を聞いたのですが、今の高校生に欠けているというものは「自尊感情」ではないか。学歴への信仰がだんだん薄れている中で、何のために学ぶのか、そういう大義を高校生が持っていないということ。そして、自信もなかなか感じられないという中で、これをいかに構築していくか先生方を悩ませている状況です。これは、当然義務教育の段階においても共通して言えることではないかと思っておりますので、そういった子供たちの心の問題を考えていく必要があると思います。

以上でございます。

○佐々木委員 ある調査の結果で、日本の6～7割の中高生が「自分のことをダメだ」と思っていたり、また、親や先生を尊敬できるかと質問に、2割程度の子どもたちしか尊敬できると答えないという内容のものがある。日本の教育で一番正していかなければいけないのはこのことではないか。何のために生きるのか、何のために勉強するのか、何のために学校に行くのか。学校に行って何を学びたいのか、どうしたいのかということを考えて、思想や哲学を持ち、そして志を立ててやっていく。このことが一番大切だし、本来問われるべきだと思う。

そういったことが入試の選考の中にないと、どうしても知識や学力を中心に、それこそ1点刻みで評価されるものになっていく。今行われている入試は、ある意味公平だろうが、公平の名のもとに学力だけで推しはかるということが、いかに子どもたちの生きる力、やる気を減退させているか。

先日、スウェーデンに教育視察に行ってきた。日本もスウェーデンの教育や教育制度から大いに学ぶことがある。大学においても授業料負担がなく、ずっと学ぶ意欲を持って学んでいる子どもたちも多いため、大学進学率も高い。イノベーション教育も進んでいる。高大接続や入試に関しても、今までの主に学力のみを問うペーパーテストでは測れない、志などそういうところをきっちり見ていくことが子どもたちにとって最も大切ではないか。そういったことが積み重なっていくことで、世界に貢献する日本人が生まれ、今以上

に日本が世界から尊敬されるようになるのではないか。

○鎌田座長 鈴木委員、どうぞ。

○鈴木委員 先生方のお話を聞かせていただきまして、お話しの内容は格調高く、教育の本質ともかかわりますので、私の発言は非常に心もとなく思っています。

現在、センター入試など一発勝負でやられていますね。このセンター入試があつて、世界で一番すばらしいと出題と採点の内容だとも言われる東大の2次試験などが行われているわけです。一発勝負の試験は決して悪いものではないと思うのです。それぞれがそれぞれの形で努力する。私の郷里の子も大都市の子も同じような条件の中、それぞれが頑張つて勉強して一発勝負に臨んでいく。しかし、そのようなモチベーションを妨げる要因もいろいろあるわけで、その一つがAO・推薦の広がりにあります。

センター入試の内容は、非常に評価が高くて、特に英語などのセンター試験の内容につきましては、現場からも高く評価されています。

そういった中で更に到達度テストを導入することについての問題点については先ほど申し上げましたけれども、どう考えてもAO・推薦がさまざまな入試の方法でやる気のある生徒の確保や人材の発掘をするといった名目が出てきたはずなのに、現状では間違つた方向に進んでいる。

大学自体が乱立してしまつて、失礼な話になるかもしれませんが、どう考えてみても、こういうふうな学部、学科ないしは大学自体が必要なのかと思わざるを得ない大学もあつて、それが手をかえ品をかえて現場の高等学校に触手を伸ばしてくる。

それが現場混乱の大きな要因になっているわけです。生徒たちは大学入試に向けて熱心にいろんな大学のオープンキャンパスなどに出かけて行きます。どんな大学であれ、一番パフォーマンス能力があり、表情豊かで話上手な魅力ある先生方が対応します。それで高校に戻つて、「先生、私、あそこの大学に行きたいです」、どうして？「先生の話が素晴らしかった」と答えます。本当にそれでいいのかというケースがたくさんあります。

大学自体の乱立が現状を招いている側面もあるわけですから、その辺に教育再生のメスが入らなければならないのではないのでしょうか。現場の教育がぐちゃぐちゃになっている面もあり、危険を感じます。

最後に、高等学校は教育活動のほかに部活動があります。高校での部活動を考えた場合に、体罰とかいじめとかいろんな問題が起こっていますけれども、日本の高校生たちはある意味では部活と学習を2つの柱として寄り添う形で頑張っています。その部活動が、これこそぐちゃぐちゃになってしまうような手立を考え、あるいは部活動を高等学校の現場から社会教育の分野に移すのかとか、そういった議論もあわせて考えながら検討を進めていただきたいと思います。

○鎌田座長 遠藤議員、どうぞ。

○遠藤議員 先ほど佃さんの話を聞いていて改めて思ったのですが、到達試験を含めて、国としてはこういう仕組みで入学試験をやります。しかし、最終的に採用するのは大学で

すから、大学が要するに自分たちがこの人間が欲しいということを踏まえて独自のプラスした試験をやればいい、そういう人材が欲しい、それが大事なのだろうと。実はレベルが違うので、先ほど鈴木さんがおっしゃったように、そういう大学は一人でも多く入っていた方がいいわけですから、むしろ試験などなくていいという大学もあると思います。

しかし、世界に活躍できる大学、例えば私は仄聞ですから正確わかりませんが、ハーバードなどは全国に十数人のスカウトマンがいて、そしてずっと1年間の活動等も見て、1つの高校からは数人しかとらない。例えば灘や開成みたいに東大に何十人などはない。いろんな多様な人間を大学から集めてくる。それが今日本は受験のテクニックだけうまい人を大学が集めてしまっている。ましてや日本の上位5,000人は大体医学部に行っているという変な形ができています。そういう意味では、安西先生が脇にいて悪いのですが、確かに今のセンター試験を含めて制度の問題もあると思いますけれども、大学がどれだけ自分たちの責任でいい人材をとるかという責任を果たしていないのではないかと。

○安西部会長 全然悪くないです。

○遠藤議員 大変恐縮でございますが、そんな思いを議論したときに実は思っておりました。

○鎌田座長 富田議員、どうぞ。

○富田衆議院議員 安西先生のペーパーにありましたけれども、3番目の特にさまざまな事情や環境により機会均等が損なわれたり学歴格差が生み出されることのないよう、また教育弱者が切り捨てられることのないように大学入学者選抜における公正さが保たれるように十分配慮すべきだと考えますというのはこのとおりでと思いますし、きょうの朝日新聞の社説に、今週火曜日に衆議院で子供の貧困対策法案が成立しました。参議院でも全党賛成しましたので、この国会で成立すると思うのですけれども、子供の貧困対策法案の中に、子供の将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう教育の機会均等を図ると条文に書いてあるのです。先ほど佐々木委員が言われたように、スウェーデンでは全部無償で学校教育を受けられる。

日本ではなかなかそういう体制になりませんが、子供の貧困問題も注目を浴びて、この社説の中では神奈川県調査で生活保護を受けている人の4割が高校中退か中卒だと。親も生活保護を受けていた人もいます。親から子への貧困の連鎖を断つには学びの支援が大切だと、この学びをどうやって考えていくかというのが今後の国の役割だと思いますし、ぜひ意欲のある子供たちが大学教育を受けられるような高大接続の部分というのも考えていただきたいと思います。

○鎌田座長 曾野委員、どうぞ。

○曾野委員 今、先生方のおっしゃったことに私は反対ではないのでございますけれども、教育の要素というものは何かというのを非常に形式化されてきているように思います。つまり、ビスケットの型のように、そこにあるいい鋳型があって、よき材料を入れて適切な

温度を与えるといいビスケットになるというような感じがしてしょうがないのです。

ですから、今初めて教えていただいて、そのこと自体はいい制度だと思いますが、スウェーデンのように、全ての若者たちが大学に安心して行けるような、安心して生きられるようになりまして、どんどん人間は墮落すると思います。そして、今、朝日新聞の記事について伺いましたが、生まれ育った環境に全く左右されないようにしたら、何を根拠に私たちは学ぶのでしょうか。左右されることも私たちにとっては或る意味で財産なのです。貧しければ貧しいように、目が見えなければ見えないことをもって、虚弱であれば虚弱なりに、もちろん、できるだけ皆が生活に不自由なく体は丈夫にするようにすべきですけれども、生まれ育った環境に左右されないようにするなどということは教育に真っ向から反対する姿勢だと私は思ってまいりました。

もちろん、みんなが幸せで「安心して生きられる」ようにすべきですが、その説には私は反対です。

○鎌田座長 では、短くお願いします。

○富田議員 朝日新聞ではなくて法文に今のことが書いてあります。子供の貧困対策法案の条文に書いてありますので、朝日新聞の論説ではありませんので。

○曾野委員 申し訳ありません。間違いをいたしました。法文と人間生活の実感とはずいぶん違いますね。でもよくわかりました。

○山内委員 本当に1～2分だけ。遠藤先生の御説、私は賛成ですが、言葉じりを捉えるようで恐縮ですが、東京大学が受験テクニックに長けたような子だけが入ってくるというように聞こえる誤解は少し解いておきたいと思います。

受験テクニックということ言えばそれまでですが（笑）、努力の過程というのは大事でありまして、その中の一つにひょっとしてテクニックもあるかもしれません。それだけでは入学は突破できません。ハーバードのような私立大学と、東京大学のように明治以来の国立大学、帝国大学の制度の在り方というのは随分違いがありますが、東大も根本的に変わるべきだという点では先生と私との間に差はほとんどありません。

東京大学が東京という名の地方大学化するという。おっしゃったように受験有名校、進学校の出身者だけで固められますと発想だとか行動とかがパターン化します。こういうことは望ましくない。全国津々浦々の公立高校から人材を集めたい、そういう学校を目指しているということで、東京だけの地方的特色を持った大学にはなりたくないというのがあります。

○鎌田座長 いろいろ大変有益な御意見を頂戴しましたけれども、安西先生の御発表との関係では、安西先生側でも誤解を解いておきたいところや補足しておかなければいけないところがあるかと思しますので、どうぞ。

○安西部会長 手短かに申しあげると、今、大学も高等学校も内情は本当に大変な状況で、入学者選抜についても、もちろん自分を背負いながら一人一人が自分の道をつくっていかなければならないわけですけれども、とにかくこの機会に、高校、大学、高大接続をこれ

からの時代に向けてこうしていきたいのだということを、ぜひこの会議で声を上げていただきたい。それはとにかくお願いしておきたいと思います。

詳細については、A0入試はだめだとか言われますけれども、やはりA0入試自体がだめなのではなくて、そのやり方、また中身の運営の仕方ですし、それぞれいろいろなことがあると思います。詳細は省略いたしますけれども、今申し上げたとおり、これからの時代の日本を背負っていく人材をつくっていく。もう今しかないので本当によろしくお願い申し上げます。

○鎌田座長 ありがとうございます。

高大接続、大学入学者選抜の問題は、一方では、大学がどういう学生を自分たちは教育したいのかという、とりたい人間をどうやってとるのが最も適切な方法なのかという側面がある一方で、大学入試の在り方が初等中等教育の在り方をかなりの程度規定するという側面もありますから、初等中等教育はいかにあるべきかという議論と両方の側面から検討していかなければいけないと思います。

いろんな国の例は安西先生の部会でも調べられていると思いますけれども、例えばフランスのバカロレアなどは哲学の全国1位の論文が『ル・モンド』の1面を全部使って全文掲載されるというすばらしい内容のものです。ああいうバカロレアに合格した人たちはみんな立派だろうと思うのですが、一流大学の先生に言わせれば日本のような入学試験をやりたいとも言っているわけで、オールマイティな方法はなかなか見つからないのだと思います。難しい課題ではありますけれども、これから少し時間をかけて議論を重ねていきたいと思います。

残された時間はわずかになりましたけれども、最後に下村大臣から一言頂戴したいと思います。

○下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣 本日はありがとうございます。きょうは高大接続・大学入試の在り方について御議論をスタートということで積極的な意見開陳がございまして、いろいろと議論すればするほど難しい問題でもあります、本質的に大変重要なことであると思います。冒頭、安西先生からお話をいただきました。特に資料1-2の安西先生のペーパーは、私はほとんど共感するところございまして、目指すべき方向はこういう方向で議論することが必要ではないかということをも感じさせていただきました。

その上で、八木先生からきょうの日経新聞のトップ記事の話がありまして私も見て驚いたのですが、あれは方向性については別に間違っていないのですが、そこまで文科省で議論しているわけではありませんし、今、安西先生からもお話がありましたが、技術論的というよりは、そもそも何のための大学入試かという思想とか理論とか、そういう本質的なものについてきちっとコンセンサスをつくって、それからあるべき大学入試ということで議論しないと、ただのテクニク的ないじくりだけの話になってしまうのではないかと思います。

私は2つの点で、大学入学試験を変える必要があると思っております。

一つは、今までの大学入学試験というのは、ある意味では近代工業化社会を支えるための有効な手段だったということは事実だと思いますが、もう時代はその次の時代に既に行っているわけでありまして。これは日本だけではなく先進諸国は全部そうですけれども、そもそも大学教育まで含めて、高校教育まで含めて、今までのやり方は通用しなくなっている中で、新たな時代に沿って、あるべき大学教育なり高校教育の、これからの21世紀、未来における教育の在り方は何なのかということについてきちっと議論していく必要があるのではないかと思います。

もう一つは、一國主義的な入学試験ではなくて、グローバル社会の中での入学試験の在り方を考えていく必要があると思っております。その中で安西先生のペーパーの1番目をお借りすれば、人材育成と人材獲得は主要国の国家戦略。この国家戦略というのは、國家主義的な意味での國家戦略ではなくて、その國の豊かさというのは、その國に所属している國民一人一人がどう豊かになるか、一人一人の國民の豊かさが結果的に國の豊かさになっていくわけで、國民の一人一人の豊かさというのは教育によってつくられるものである。教育によって一人一人の豊かさをどうつくっていくかということはどうバックアップするかということが問われるのではないかと思います。

そういう前提で、今の入学試験が本当に一人一人の國民といえますか、學生の目指すべき方向に合った試験内容になっているのかということを見ると、私はそうっていないのではないかと考えています。卑近な例で、もう随分昔の話ですが、高校受験をして、八木先生の地元の高崎の高崎高校に入って驚いたことがあります。群馬県の中学3年生の模擬試験で、年間で5回模擬試験があるのですが、高校で入ったクラスに5回ずっと群馬県のトップだった人間がいたのです。ところが、彼は慶應高校を受けて落ちたと言ったのです。慶應高校を落ちて高崎高校に入ったのですが、そのとき私は、そんなに難しい高校があるのかということとびっくりしたのです。私が入った高校というのは群馬で名門だと自負したにもかかわらず、そんな難しい高校があるのかと。

ところが、後で私が実際大学時代から学習塾をして思っているのは、彼もそうでしたけれども、慶應高校に入るための受験勉強をしなかっただけの話なのです。つまり、学校の勉強だけをしていても入ることはできないです。つまり、入学試験の勉強をしなければ入らない。いいか悪いかは別にして、そういうテクニク的な受験勉強をしなければ入れないです。

同じように、今でも東大が3,000人取る中でもう一度試験をすれば、そのうち3分の1は入れ替わるだろうと。つまり、3分の1は運です。上位3分の1は何回試験をしても東大に絶対入れる実力はある、けれども、下位3分の1はもう一度試験があったら不合格になるというような一発勝負的な部分があります。これからそういう入学試験での能力が世界の中でどういうふうに使われるのかということ、一発試験的なペーパーテストだけでない能力のほうに常に問われていると思うのです。

ですから、実際、東大でもそういう試験によらない推薦入試という、違う形でのチャレンジも今進めようとしているわけであります。つまり、真に世界の中で通用する、日本の社会の中で幸せに生きていくための大学教育を、ぜひそれに資する教育を行うよう、大学もこれから大きく転換しなければ通用しない時代に世界がなっていると思います。

そういう大学で本当に必要な人材をさらに伸ばすための入学試験という位置づけの中でどうなるか。大学入学試験の位置づけが高校以下にすごく影響するわけです。高校以下の教育というのはいろいろあるかもしれませんが、学校によっては、いかにいい大学に入るための教育をするか、つまり、入学試験でどう合格させるための教育をするかということに端的に言えば特化した教育ですから、大学入試があるべき人間像に合った入学試験であれば、そういうふうに特化した高校あるいは中学はあるべきです。けれども、そもそも入学試験そのものが社会のこれからの物差しとずれている、前の物差しを使っている中で、相変わらず高校以下でそういう教育をするということは、日本の将来の教育にとって望ましくない、ということから、あるべき入学試験の在り方について考える、ということは当然高校以下の教育について考えるということですし、もちろん、大学そのものも、これからのあるべき大学教育の中でどういう人材育成をするのかという視点から、ぜひ今回は、そういう意味では時間がかかる話かもしれませんが、教育再生実行会議で御議論をさせていただきながら、あるべき大学入学試験の在り方そのものの提言が大学教育や高校以下の教育まで変えていくような提言をしていただければ大変ありがたいと思います。

御報告ですが、お手元に資料が配られているかと思いますが、「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」でございます。これは本会議の第一次提言を受けた取組として運動部活動の体罰の問題について文部科学省におきまして3月に有識者会議を発足させ、スピーディに議論を重ねまして、先月27日に運動部活動での指導のガイドラインを取りまとめました。

今後、このガイドラインを各学校に配付、周知し、体罰は決して許されないとの意識を徹底し、体罰を根絶するとともに、適切な内容と方法により運動部活動の指導が行われるようにしてまいりたいと思います。

そういう意味で、この教育再生実行会議で提言をされた内容をいろんなレベルで次々と達成するように努めておりますので、御報告を申し上げたいと思います。

今後とも大学入試の在り方について、さらに深めた議論を引き続きお願い申し上げたいと思います。ありがとうございます。

○鎌田座長 どうもありがとうございました。

最後になりましたけれども、安西部会長におかれましては、本日はお忙しい中、本会議に御出席賜り、また有益な御発表をいただきましてまことにありがとうございました。

次回、第10回の会議におきましては、引き続き高大接続・大学入試について議論してまいります。その際、議論の参考とするために、諸外国の状況について外部有識者からの御発表をいただくことを予定いたしております。

また、今後の予定といたしまして、7月から8月にかけて、高大接続や大学入試について特色ある取り組みを行っている大学等への視察なども行って議論を深めたいと思います。それらを踏まえまして、おおむね9月ごろまで少し時間をかけてこのテーマに取り組んでまいりたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

次回の会議は、6月26日の開催を予定いたしております。委員の皆様におかれましては、本日十分御発言できなかつたこともあろうかと思いますが、その場合には事務局に文書で御提出をいただければと思います。

それでは、本日はここで閉会とさせていただきます。皆様、長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。